

鞠智城

鞠智城は、7世紀後半に大和朝廷が築いた山城で、中心となる区域だけで、周囲3, 5 km、面積55 ha であり、その外側の城域も合わせると約120 ha にもおよぶ広大な城である。

663年の「白村江の戦い」で唐・新羅の連合軍に大敗した大和朝廷が日本列島への侵攻の備え西日本に築いた城の一つで、九州を統治していた太宰府やそれを守るための大野城などに武器・食糧を補給する支援基地であった。その後、次第に軍事施設としての役割は薄れ、役所的な施設に変化しながらも、約200年は存続したものと考えられている。

『続日本紀』など、国の歴史書にも記載のある全国有数の重要遺跡として、平成16年2月27日に国史跡に指定された。

昭和42年度からの県の発掘調査により、八角形建物跡をはじめとする72棟の建物跡や、貯水池跡、土塁跡など、当時の姿を物語る貴重な遺構が相次いで発見されている。

このような発掘調査の結果に基づき、平成6年度から4棟の復元建物（八角形鼓楼・米倉・兵舎・板倉）をはじめ、城の立地や規模、構造などを体験的に学習できる歴史公園としての整備を進めている。